パーソナルネットワークと個人主義・間人主義

黒沼桃子 今野琢人 柴崎千菜美 塚口皓明
(東北大学 教育学部)

1. はじめに

1.1. 問題の所在と本論の目的

本論の目的は、個人主義的態度形成に対してパーソナルネットワークの構造がどのように影響しているのか、またそれが都市規模によって異なるのかを明らかにすることである。

日本では一般的に、「日本人は集団主義的である」と言われている。実際、異文化間コミュニケーションの分野では、日米の文化比較研究が数多く行われ、その結果「多くの研究者達が、アメリカは個人主義的な文化であり日本は集団主義的な文化であるという点で合意している」(Gudykunst&Nishida,1994)。しかし統計数理研究所の調査によると、「たいていの人、他人の役にたとうとしていると思いますか、それとも、自分のことだけに気をくばっていると思いますか」という質問に対し、36%が「他人のため」と回答し、半数を超える51%が「自分のため」と回答しており、日本人は他人よりも自分に気を配っていると感じていることがわかった(統計数理研究所, 2008)。このことから、日本人は集団主義的であるというよりもむしろ個人主義的なのではないかと考えられる。

浜口(1982)によれば、自己への依拠を本質とする個人主義は、生活上のあらゆる充足を自己自身の力と責任によってはかろうとするため、自己を律する強い自我が形成されていなければならないが、こうした強い自我は自己への信頼を重んずるため、個人主義化は他者不信に陥りやすくなる。この傾向は、社会成員の各個化(individuation)強まる現代では、集団や組織の統合にとって致命傷になりかねない。近代組織は、組織の構成員と組織体の二元的な対立が激化の傾向にあり、個人主義化は両者の対立を深めるため、両者の共生をもたらす間人主義が必要とされる(浜口, 1982)。また、文部科学省委託の「地域の教育力に関する実態調査」(2005)によれば、56.1%の人が個人主義の浸透が地域の教育力低下の要因となっていると回答した。

個人主義化によって、地域の教育力や集団や組織の統合に負の影響を与えるのであれば、個人主義化は問題であると考えられる。個人主義的傾向に関して統計データに基づいた分析を行った研究は多くはないが、松尾(1997)の研究では人々が示す傾向とパーソナルネットワークの関係について述べられている。この松尾(1997)では、人々が持つ「異質性」の高さとネットワークとの関連について分析を行った。その結果、ネットワークが分散しているほど「異質性」が高くなるということが示された。

また、現代日本社会において集団主義から緩やかな個人主義へ向かっていることを示した杉万(2010)では、過疎地域における地域活性化運動の例において都市部と地方におけるネットワークの特性に違いがあることが示唆されている。これらの先行研究からネットワ

ークと「異質性」という人々の性質に関連があること、またその特性は都市と地方で違いがあることが確認された。しかし松尾(1997)は異質性に対する寛容度などを扱ったもので、個人主義的傾向そのものを扱った研究ではない。異質性に対する寛容度はあくまで個人主義的傾向を説明する指標の一つでしかなく、個人主義について十分に説明できるとは限らない。

そこで本論では、人々の個人主義的傾向に対して個人が持つネットワーク特性がどのように影響するのか、更にそれは居住地域によって変化するのかを論じていきたい。

1.2. 個人主義・集団主義

まず、個人主義と集団主義、間人主義について定義を確認しておきたい。個人主義とは集団から独立し、自分の好みや欲求や権利や他者の間に結んだ契約に基づいて動機づけられ、自己の目標を他者のものより優先し、他者との利害関係を合理的に分析し行動する存在とみなす人間観である。

また集団主義とは、自己よりも内集団の観点や要求や目標を重視し、自分の楽しみや利害よりも社会規範や義務に基づく行動を重視し、内集団の成員と共有し、進んで協力する存在とみなす人間観である(Triandis, 1995)。

1.3. 間人主義

「間人主義」は、「個人主義」や「集団主義」に対して浜口(1982)において定義された言葉である。浜口によれば、日本社会は個人主義でも集団主義でもなく「間人主義」である。間人主義とは、個人主義に対して既存の関係の間柄を重視し、それを保とうとすることである(浜口, 1982)。先述した社会規範や義務に基づく行動を重視する「集団主義」とは異なり、「間人主義」は人間関係の中で初めて自分を意識し、間柄を自己の一部として捉える。本論では、この「個人主義」と「間人主義」を主に従属変数として扱う。浜口(1982)では個人主義の対極として間人主義を位置づけているが、本論でも同様に個人主義の対極として扱う。以上を踏まえた上で、本論では以下の仮説の検証を行っていく。

2. 仮説

2.1. ネットワーク集中度と個人主義的傾向の関係

松尾(1997)は、人々が持つ「異質性」の高さとネットワークとの関連、都市環境とネットワークの関連について分析を行った。その結果、人々がもつ「異質性」の高さとネットワーク特性による説明において、ネットワークが分散しているほど「異質性」が高くなるということが示された。

この松尾(1997)では、ネットワークの密度をネットワーク特性としてとらえて分析が行われた。ネットワーク密度とは、任意のネットワーク内における最大可能な紐帯の数と実際の紐帯の数の割合である。この最大可能な紐帯数に対する実際の紐帯数が多くなるほどネットワーク密度は高く、逆に少なければネットワーク密度は低くネットワークは分散しているといえる。

また「異質性」については、特に通説に対する寛容度においてネットワークが分散しているほど異質性が高いということが示された。ここで扱われている「通説」とは、共産主義や不倫、自殺などに対する一般的な価値観であるが、分析結果から密度の高いネットワークを持つ人々に比べて社会規範に縛られない傾向にあると考えられる。このことから、彼らは集団主義的に社会規範を重要視しているというよりもむしろ個人主義的な傾向を示しているのではないかと推測できる。

そこで本論では、まずネットワーク特性と個人主義・間人主義的傾向に着目し以下の仮説をたてた。

「交友関係が特定のネットワークに集中しているほど人々との間柄を重視し、個人主義的傾向が弱くなる。」

ここでは松尾(1997)で分析した「異質性」から、さらに個人の傾向を強く表す「個人主義的傾向」および先述した「間人主義的傾向」について検討する。またネットワーク特性についてはネットワーク密度ではなく、より個人のネットワーク構成に着目した「ネットワーク集中度」を使用する。松尾(1997)においては「ネットワーク密度」が変数として扱われたが、本論の場合は単純に個人の交友関係に着目していることから「ネットワーク集中度」を取り入れた。人々の持つ交友関係が特定のネットワークに集中しているか否かによって、ネットワーク特性を分類する。「ネットワーク集中度」の定義および算出方法に関しては後述する。

2.2. 居住地域との関係

しかし、人々が個人主義的な傾向を示すか否かについてはネットワーク要因だけに規定されるとは限らない。杉万(2010)によれば、都市部と地方においては地域の体質に差異があるという。特に地方の場合、新しい試みに耳を閉ざす保守性や地域の外に目を向けようとしない閉鎖性などが見受けられる点などにおいて、都市部とは異なっている。すなわち都市部と地方では人々およびそのネットワークを取り巻く環境が異なり、個人主義的な傾向を示すか否かについても居住地域による影響を受けると考えられる。そこで本論では、居住地域という要素も含めた分析を行う。

以上より仮説1として、

【仮説1】「交友関係が特定のネットワークに限定される人ほど、人との間柄を重視するために個人主義的な傾向が弱く、間人主義的傾向が強い。またその関係は地方においてより顕著に現れる」と定める。

2.3. ネットワークの規模と個人主義的傾向の関係

伊藤(2000)では、パーソナルネットワークの規模が結婚や出産などに関する非伝統的意見への寛容性と関連することが明らかになった。ネットワークの規模が大きいほど、非伝統的な意見に寛容であるという結果が示された。すなわち人々が持つネットワーク規模が、人々の選択や特性に影響を及ぼすといえる。先述したように本稿では従属変数として「個人主義的な傾向」を設定することから、仮説を以下のように定める。

「ネットワークの規模が大きくなるほど多様な人々と関わることで特定の集団に縛られに

くくなり、個人主義的な傾向が弱くなる」

ネットワークの規模が大きくなる、すなわち友人数が増えるほど多様な関係を持ち、多様な価値観や主張に触れる機会が増える。その関係を現在においても保有していることから特定の集団における価値観や主張に縛られにくくなり、個人主義的な傾向を示しにくくなると考えられる。

さらに仮説 1 と同様に杉万(2010)の研究に示されるような地域による差異も検討することから、仮説 2 は以下の通りになる。

【仮説 2】「ネットワーク規模が大きく友人数が多い人ほど、個人主義的な傾向が弱くなる。その関係は地域によって差が生じ、地方の方が都市に比べてその傾向が顕著に現れる」

3. 調査方法

3.1. データ

今回の調査は、東北大学教育学部の教育学実習および山形大学地域教育文化学部の社会調査演習との合同で 2012 年 6 月 13 日から 25 日にかけて実施した。学生を除く日本全国の 20 歳以上 39 歳以下の男女を対象としている。被験者は、事前の協力伺いの段階で平成 22 年国勢調査の結果に基づき、年代（学生を除く 20 代、30 代）および学歴（小学校・中学校、高等学校、短期大学・高等専門学校、大学・大学院）で割り当て募集。それをもとに、インターネット調査モニターのうち協力依頼に応じた先着 927 名から単純無作為抽出したのが、今回の対象者 500 名である。調査は郵送調査法で行い、回収の結果有効回収票数は 465（93%）であった。

質問調査紙自体は「若年者のライフスタイルと意識」に関する内容とし、その中で本論において扱う質問項目は 2 つである。ひとつは質問紙問 26、個人主義・間人主義を示すための質問である。項目は浜口ら（1985）が実施した調査『日本の基本的価値観に関する実験・調査研究』をもとに、度数分布等を参考にしながら 9 つを引用し、それぞれ「とてもそう思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の 4 段階でたずねた。二つ目は質問紙問 19、対象者の友人の数を出会ったきっかけごとにたずねた質問である。出会ったきっかけは、「隣近所」「現在の職場・仕事関係」「学校時代の友人」「自分の子供を通じた関係」「趣味・学習・スポーツなどの活動（学生時代を除く）」「過去の職場・仕事関係」「その他」の 7 つに分けており、対象者がどのような場所においてネットワークを持っているのかわかる。それによって対象者の持っている「ネットワークの種類」を知ることができる。また、直接会っている友人の数をたずねることによって、インターネット上や通信機器による交流のみの友人を省き、実際に会っている友人のネットワーク規模を調べる。

3.2. 変数

3.2.1. 個人主義間人主義得点

個人主義的傾向を示す質問紙問 26 の項目 A, D, F, G, H, I に関しては、「とてもそう思う」を 3 点, 「そう思う」を 2 点, 「あまりそう思わない」を 1 点, 「そう思わない」を 0 点と, それぞれ点数化した。点数が高くなるほど, 個人主義的傾向を強く示しているといえる。間人主義的傾向を表す残りの項目 B, C, E については調査結果を分析した結果, 表 1 のようになった。先述した個人主義的傾向を表す項目群と互いに負の相関があることが確認できる。したがってこの項目 B, C, E を個人主義的な傾向を示す項目群に対する反転項目として使用し, 個人主義および間人主義的傾向を一元的な変数で表現する。よって間人主義的傾向を示す項目群については「とてもそう思う」を 0 点, 「そう思う」を 1 点, 「あまりそう思わない」を 2 点, 「そう思わない」を 3 点とした。この点数を対象者ごとに合計し, 以下「個人主義間人主義得点」とする。個人主義間人主義点数が高いほど個人主義的な傾向が強くなる。さらに個人主義間人主義得点をもとに対象者を半数に分割し, 得点の低い群・高い群としたうえで分析を行う。

表 1. Pearson の相関係数

	a	b	c	d	e	f	g	h	i
項目 a	1	.017	-.028	.295	-.085	.311	.300	.176	.109
項目 b	.017	1	.420	-.107	.370	-.066	.208	-.059	-.078
項目 c	-.028	.420	1	-.211	.310	-.145	.088	-.111	-.218
項目 d	.295	-.107	-.211	1	-.192	.350	.149	.266	-.301
項目 e	-.085	.370	.310	-.192	1	-.076	.072	-.078	-.198
項目 f	.311	-.066	-.145	.350	-.076	1	.214	.245	.215
項目 g	.300	.208	.088	.149	.072	.214	1	.140	.064
項目 h	.176	-.059	-.111	.266	-.078	.245	.140	1	.338
項目 i	.109	-.078	-.218	.301	-.198	.215	.064	.338	1

3.2.2. ネットワーク集中度

個々人が持つ現在の友人ネットワークが, 特定のネットワークに集中しているか否かを検証するために変数「ネットワーク集中度」を使用する。出会ったきっかけごとの友人数をたずねた質問紙問 19 を利用し, 最も友人数が多いネットワークにおける友人数のネットワーク全体に対する比率をとることで, 個々人の持つネットワークが集中的か, 或いは分散的かを検証する。

【計算式】 (最大ネットワークにおける友人数) / (全体の友人数) × 100

以上の式によりネットワーク集中度をパーセンテージ表記し, 数値が大きいほどネットワークは集中しており, 小さいほどネットワークは分散的である。またこれらを(友人が 1 人もいない)=1, 1~49%=2, 50~99%=3, 100%=4 とカテゴリ化したうえで検証を行う。

3.2.3. ネットワークの規模

質問紙問 19 より，出会ったきっかけごとの友人数を対象者ごとに合計，回答ごとに 0 人，1 から 5 人，6 から 10 人，11 人以上の 4 段階に分割した．なお，対象者によっては百人単位での解答もみられたが，実際に会っている友人数としては考えにくい数値のため，外れ値のため欠損値とみなし，分析から除外した．未回答を省いた上で，分析に使用する有効数は 460 となっている．

3.2.4. 居住地域

仮説の検証において使用する「居住地域」については，質問紙の現在における居住地を使用した．「都市」および「地方」の分類については総務省「地方財政白書」のける定義を用い，「都市」を人口 50 万人以上の都市および東京 23 区，これに該当しない地域を「地方」とした．

3.3. 分析方法

以上の変数を用いて仮説 1，仮説 2 の検証を行う．仮説 1 の検証においては「ネットワーク集中度」，「個人主義間人主義得点」をそれぞれ独立変数，従属変数とし，さらに「居住地域」を第三の変数として扱う．仮説 2 の検証においては「ネットワーク規模」，「個人主義間人主義得点」をそれぞれ独立変数，従属変数としたうえで第三の変数「居住地域」との関連も検証する．分析は主にカイ二乗検定を用いて行い，それぞれの変数における関連をみることによって仮説の検証を行っていく．

4. 分析結果

基本統計量

表 2. ネットワーク集中度

		度数	%	有効%
有効	サイズ 0	31	6.7%	6.8%
	1~49%	100	21.5%	21.9%
	50~99%	222	47.7%	48.7%
	100%	103	22.2%	22.6%
	合計	456	98.1%	100%
欠損値		9	1.9%	
合計		465	100%	

表 3. ネットワーク規模

		度数	%	有効%
有効	0 人	31	6.7%	6.7%
	1~5 人	168	36.1%	36.5%
	6~10 人	114	24.5%	24.8%
	11 人以上	147	31.6%	32.0%
	合計	460	98.9%	100%
欠損値		5	1.1%	
合計		465	100%	

表 2 における「1~49%」「50~99%」「100%」はネットワークの集中度を表し，1~49% はネットワークを多く保有しかつ友人数も分散的であるということ，50~99% はネットワークを 2 つ以上保有しているがどれか 1 つのネットワークに友人数が偏っていること，

100%は個人の保有するネットワークが1つだけであることを表している。

4.1. 仮説1の検証

仮説1「交友関係が特定のネットワークに限定される人ほど，人との間柄を重視するために個人主義的な傾向が弱くなり，間人主義的傾向が強くなる．またその関係は地方においてより顕著に現れる」を検証するため，クロス集計表(表4)からカイ二乗検定を行いネットワーク集中度と個人主義間人主義得点に関連があるかどうかをみた．その結果，カイ二乗値は有意水準5%で臨界値を上回り関連があるとみることができる．結果から，ネットワークが分散的になるほど個人主義点数が高くなり，個人主義的な傾向が強くなると判断できる．一方で，ネットワークのないすなわち友人数が0と回答した層とネットワーク集

表4. ネットワーク集中度と個人主義間人主義点数のクロス表

		個人主義間人主義点数			
		低	高	合計	
ネットワーク 集中度	なし	度数	8	23	31
		%	25.81%	74.19%	100%
	1～49%	度数	56	44	100
		%	56.00%	44.00%	100%
	50～99%	度数	112	110	222
		%	50.45%	49.55%	100%
	100%	度数	45	58	103
		%	43.69%	56.31%	100%
合計		度数	221	235	456
		%	48.46%	51.54%	100%

($\chi^2=9.936$ df=3 p<.05)

表5. ネットワーク集中度(0除く)と二分個人主義間人主義点数のクロス表

		二分個人主義間人主義点数			
		低	高	合計	
ネットワーク 集中度	1～49%	度数	56	44	100
		%	56.00%	44.00%	100%
	50～99%	度数	112	110	222
		%	50.45%	49.55%	100%
	100%	度数	45	58	103
		%	43.69%	56.31%	100%
合計		度数	213	212	425
		%	50.12%	49.88%	100%

($\chi^2=3.09$ df=2 p>.1)

表 6. ネットワーク集中度と 個人主義間人主義点数と 居住地域 のクロス表

				個人主義間人主義点数		合計	
				低	高		
都市	1～49%	度数	10	20	30		
		%	33.33%	66.67%	100%		
	ネットワーク 集中度	50～99%	度数	31	32	63	
		%	49.21%	50.79%	100%		
		100%	度数	10	13	23	
		%	43.48%	56.52%	100%		
	合計		度数	51	65	116	
			%	43.97%	56.03%	100%	
	地方	1～49%	度数	46	24	70	
			%	65.71%	34.29%	100%	
ネットワーク 集中度		50～99%	度数	81	78	159	
		%	50.94%	49.06%	100%		
		100%	度数	35	45	80	
		%	43.75%	56.25%	100%		
合計		度数	162	147	309		
		%	52.43%	47.57%	100%		
合計		1～49%	度数	56	44	100	
			%	56.00%	44.00%	100%	
	ネットワーク 集中度	50～99%	度数	112	110	222	
		%	50.45%	49.55%	100%		
		100%	度数	45	58	103	
		%	43.69%	56.31%	100%		
	合計		度数	213	212	425	
			%	50.12%	49.88%	100%	

(都市 : $\chi^2=2.081$ df=2 p>.1)

(地方 : $\chi^2=7.510$ df=2 p<.05)

中度 100%の層で個人主義間人主義得点が高くなることから分かるように、連関係数であるオッズ比が 0.039 と低い数値を示している。そこでネットワークのない層を除いて再分析を行ったところ、表 5 のような結果が得られた。この場合のカイ二乗値は有意水準 10% の臨界値も下回り、関連があるとはいえない。すなわちネットワークを持たない人々は個人主義的傾向が非常に強く、全体の分析結果に大きく影響していたということが分かった。これを除いて分析すれば、ネットワーク集中度と個人主義的傾向に関連は見られない。

表 7. ネットワーク規模と 個人主義間人主義点数のクロス表

		個人主義間人主義点数			
		低	高	合計	
ネットワーク規模	0 人	度数	12	19	31
		%	38.71%	61.29%	100.00%
	1～5 人	度数	89	76	165
		%	53.94%	46.06%	100.00%
	6～10 人	度数	74	39	113
		%	65.49%	34.51%	100.00%
	11 人以上	度数	101	46	147
		%	68.71%	31.29%	100.00%
	合計	度数	276	180	456
		%	60.53%	39.47%	100.00%

$$(\chi^2=14.454 \quad df=3 \quad p<.01)$$

また、地方と都市という要素を含めて分析した結果が表 6 である。ただし、表 4 よりネットワークを持たない層はネットワークを持つ層と明らかに結果が相違するため分析において除外し、実際にネットワークを保有する層に対して分析を行った。分析の結果として、都市では居住地域を考慮しない場合と同様に関連がみられなかった。しかし地方においては、ネットワーク集中度が高いほど個人主義的傾向は高くなり、これは有意水準 5% で関連がみられる。ここから、地方においてのみネットワーク集中度と個人主義間人主義得点の間に関連があるということが出来る。しかしこの関連については仮説 1 を支持するものではなかった。ネットワークが集中的になるほど個人主義間人主義得点は高くなり、より個人主義的な傾向を示すということがわかった。

以上より、ネットワーク集中度と個人主義的傾向には関連がないが、地方と都市という区分で見ると地方においてはネットワーク集中度が高いほど個人主義的傾向も強くなるという結果が得られた。

4.2. 仮説 2 の検証

仮説 2「ネットワーク規模が大きく友人数が多い人ほど、個人主義的な傾向が弱くなる。その関係は地域によって差が生じ、地方の方が都市に比べてその傾向が顕著に現れる」についても仮説 1 と同様に、クロス集計表を用いてカイ二乗検定を行って検証する。

表 7 より、カイ二乗値は有意水準 1% で臨界値を上回り、ネットワーク規模と個人主義間人主義得点には関連がみられた。ネットワーク規模が大きくなるほど個人主義的な傾向は弱くなり、間人主義的な傾向が強くなる。これより、「ネットワーク規模が大きいほど個人主義間人主義得点が低くなる」という仮説が支持されたといえる。

さらに居住地域を導入してみると、ここでも仮説①と同様に都市では関連がなくなるが地方では関連がある。これより、都市ではネットワーク規模と個人主義的傾向に関連がないが、地域では仮説 2 が支持され、ネットワーク規模が大きいほど個人主義的傾向が弱いという結果が得られた。

表 8. ネットワーク規模 と 個人主義間人主義点数 と 居住地域 のクロス表

		個人主義間人主義点数			合計	
		低	高			
都市	ネットワーク規模	0人	度数	5	7	12
			%	41.67%	58.33%	100.00%
		1～5人	度数	22	19	41
			%	53.66%	46.34%	100.00%
		6～10人	度数	22	11	33
		%	66.67%	33.33%	100.00%	
		11人以上	度数	25	17	42
		%	59.52%	40.48%	100.00%	
		合計	度数	74	54	128
			%	57.81%	42.19%	100.00%
地方	ネットワーク規模	0人	度数	7	12	19
			%	36.84%	63.16%	100.00%
		1～5人	度数	67	57	124
			%	54.03%	45.97%	100.00%
		6～10人	度数	52	28	80
		%	65.00%	35.00%	100.00%	
		11人以上	度数	76	29	105
		%	72.38%	27.62%	100.00%	
		合計	度数	202	126	328
			%	61.59%	38.41%	100.00%
合計	ネットワーク規模	0人	度数	12	19	31
			%	38.71%	61.29%	100.00%
		1～5人	度数	89	76	165
			%	53.94%	46.06%	100.00%
		6～10人	度数	74	39	113
		%	65.49%	34.51%	100.00%	
		11人以上	度数	101	46	147
		%	68.71%	31.29%	100.00%	
		合計	度数	276	180	456
			%	60.53%	39.47%	100.00%

(都市 : $\chi^2=2.684$ df=3 p>.1)

(地方 : $\chi^2=13.474$ df=3 p<.01)

5. 結論

本論では、2つの仮説を立てて、ネットワークと個人主義的傾向の関係を居住地域という指標を通して説明しようとしてきた。分析結果の要旨は次の5点である。

- ① ネットワークを持たない人々は、個人主義的傾向が非常に強い
- ② 都市において、ネットワークを持つ人々の中ではネットワーク集中度と個人主義的傾向の間に関連はなかった
- ③ 地方において、ネットワークを持つ人々の中ではそのネットワークが集中的になるほど個人主義的傾向が高くなる
- ④ 都市において、ネットワーク規模と個人主義的傾向の間に関連はなかった
- ⑤ 地方において、ネットワークの規模が大きくなるほど個人主義的傾向が低くなる

以上の5点より、本論の目的であるパーソナルネットワークの広さ・集中度に着目して居住地と個人主義・間人主義の関連は地域においてのみ認められた。また、個人主義的傾向はネットワーク規模が大きいほど、ネットワーク集中度が低くなるほど弱くなり、仮説2は支持された。

今回の分析では、個人主義的傾向に個人の持つネットワーク、すなわち友人数や友人の多様性が影響していることがわかった。ネットワークを持たない者は個人主義的傾向が高い。これは生活をしていく上でネットワークが機能しておらず、そのため意識の部分でも個人が重要であると考えに至るのではないか。さらに、都市と地方という居住地域で個人主義的傾向に差がみられることから、相関のない都市でも同様に考えることができる。つまり、都市に住む人々も生活の場面でネットワークが機能する機会が少なく、ネットワークに対する重要意識が低いのではないかと考えられる。逆に地方ではネットワークが生活する上で機能し、個人の行動自体に大きく影響するため個人主義的傾向にも同様の効果があるといえよう。

今後の課題としては、個人主義的傾向が生活場面のどの行動に影響するのかを検討し調査すること、個人がネットワークをどれほど重要視しているか、それが居住地域によって違いがみられるのかということ进行分析していく必要があるだろう。個人の意識に対して、ネットワークの重要性が高いことを検証する分析がなされること、居住地域によるネットワークの重要性の違いを明らかにする分析がなされることを今後期待する。

参考文献

Gudykunst, W. B, & Nishida, T. 1994, *Bridging Japanese/North American differences. Thousand Oaks, CA: sage.*

統計数理研究所, 2008, 「日本人の国民性調査」, (取得日:2012年8月30日, <http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/index.htm>).

文部科学省, 2005, 「『地域の教育力に関する実態調査』報告」, (取得日:2012年8月8日, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/003/siryou/06032317/002.htm).

- 浜口恵俊,1982,『間人主義の社会 日本』東経選書.
- Triandis,H.C,1995,*individualism and collectivism*,Boulder,CO:westview press.
- 松尾浩一郎,1997,「社会的異質性のネットワーク分析：異質性を高めるのは都市環境かネットワークの特性か」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』45:61-70.
- 杉万俊夫,2010,「『集団主義—個人主義』をめぐる 3 つのトレンドと現代日本社会」『集団力学』27:17-32.
- 伊藤泰朗,2000,「社会意識とパーソナルネットワーク」盛岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会,141-159.